

雜纂

大戰後公表されし重要なる國際關係

史料について

大村 作 次 郎

最近歐洲國際關係史（吾人はこゝにその限界を  
一八七一—一九一四にとらんとする）の研究は、  
從來研究の對照たる外交文書史料の不足によつて  
頗る不満足なる状態にあつたことを、吾人は否定  
することは出来ない。所謂 Secret Diplomacy の活  
動時代であつて、諸國間の祕密條約、重要なる外  
交文書は殆んど門外不出、外交史學者の近寄るを  
許さなかつた。故に、極めて僅少に公表された外  
交文書、政治新聞紙、關係政治家の論談等の貧弱  
なる史料を以て、外交史研究に當らなければなら

なかつた當時の史學者の勞苦は大なるものであつ  
た。吾人はその一例として、三國同盟 (Dreihund)  
の研究を舉げることが出来る。この同盟は、周知  
の如く、一八八二年ビスマルクによつて獨逸伊三  
國間に締結され世界大戰の初期まで繼續したもの  
であつて、三十餘年間歐洲國際關係を支配した、  
頗る重要なるものであるが、條約文そのものは勿  
論、條約締結交渉の際の文書が、長年闇黒の中に  
葬り去られて居た爲に、これが研究に當つた史學  
者の苦心が如何に大なるものであつたかは察知す

るに難くな。 Singer. (Geschichte des Dreibundes. Leipzig. 1914. その他) Fráknói. (Kritische Studien zur Geschichte des Dreibundes, Budapest. 1917. その他) Helmolt (Unser Mission vom Dreibunde, Zeitschrift für Völkerrecht. 1916. その他)

等の史學者に對して、吾人は大なる尊敬を拂はなければならぬ。而してこれらの著述が史料の不足の爲に不満足なる點を多く持つて居ることは當然のことであつて、現在に於て多く修整されるに至つたからとて決して彼等の功蹟を否定することは出来ない、それらの著述と、殆んど完全なる程度にまで豊富なる史料を有して頗る優秀なる著とせる H. Granfeldt; Das Dreibundsystem, 1879—1916. Berlin. Stockholm. Bd. I. 1925.) とを比較する時、吾人は大なる興味を感じるのである。しかるに、世界大戦中及びその後に於て、豊富なる祕密史料出現するに至り、最近國際外交史の

研究は全くその面目を改めるに至つた。以下、その最も重要なもの數種に就いて一言せんとする。

世界大戦中及びその後に於て、かゝる未曾有の大戦の原因、責任果して何處にありやとの所謂 Kriegsschuldfrage が、各國の政治界、史學界に於て盛んに論議されたが、大戦の及ぼす影響の甚大なる點より見て、これは當然のことであつた。而して一個の事件の原因、責任を明かにするには、先づ事件の真相を明かにせなければならぬ。こゝに於てか交戦諸國は、大戦勃發に關する祕密外交文書を公表し、各國それら自國の外交の平和的にして大戦の勃發に責任なきことを示さんとしたのである。これ、大戦勃發直後、各國政府より公表されたる所謂 *Faithbücher* であつて、これを蒐集せしものが各國に於て刊行されて居る。英國では *Collected Diplomatic Correspondence relating to*

the Outbreak of the European War. London. 1915.  
米國では J. B. Scott; Diplomatic Documents relating to the Outbreak of the European War. New York, 1916. 獨逸では Bernstein; Dokumente zum Weltkrieg. Berlin. 1917. 佛國では J. Reinach, Histoire de douze jours. Paris. 1917. 及び Pages d'Histoire, 1914—1918. の中に載せられて居る。故原博士の「世界大戦史」に利用されたのは、この Farbücher 及び後に述べる獨逸のカウツキイ文集及び埃太利共和國の赤書とである。

しかしながら、これらの文書公表の動機は、上述の如く大戦に對する自國の無責任を示さんとしたものであるから、その文書公表に際し、大なり小なりの無理があつたことは充分に推知し得る。

例へば、露國の橙書の誤謬は G. von Romberg 之れを指摘し (Die Fälschungen des russischen Organgebüches. Berlin. 1922) 英國の青書は最近公表さ

れた英國外交文書によつて補足され、獨逸の白書埃國の赤書も後述の如く共に訂正されたのである。

大戰の終末期、露獨埃三國の帝政崩壊せし時よりヴェルサイユ會議にかけて俄然貴重なる史料が豊富に出現するに至つた。而して過去の政府と完全に絶縁し、遠慮と束縛から解放された、以上の三國に於て文書の公表最も盛んであつたことは當然であつて、殊に露國のソヴェート政府の如きは、過去に遠慮する必要がなくなつた所か、更に進んでツアールの政治外交の欠點を指摘するに大なる利益を感じたのであるから、その公表した文書が最も純正なるものであつたことは注意せなければならぬ。國家の崩壊、王室或は政府の變更などは吾人に貴重なる史料を提供すること多きは歴史研究者の看過し得ぬ所である。

先づ獨逸では、世界大戰前の歐州國際關係の中

心國であり、大戦に最も密接なる關係を有することは自他共に認むる所であるから、史料の公表並にそれに關する論議最も旺盛を極めたのである。

大戦勃發直後獨逸政府より發表された文書は、その公表の動機より考へて、充分なる信頼を受くべきものでないことは上述の如くであるが、獨逸新共和政府はこれを遺憾なりとし、これが訂正の爲に完全なる大戦直前外交文書集を公表した。これ、カウツキイ文集の名を以て有名である、社會學者カツキイの蒐集 Montgelas 伯 Schicking 教授の編輯にかゝる Die deutschen Dokumente zum Kriege (Berlin, 1919, Dez.) である。これによれば、セライエボ事件後奥匈國政府のセルビアに對する彈壓政策を獨逸政府が是認、援助し、以て大戦を惹起せし點に於て獨逸政府は大戦勃發に充分なる責任ありとするのである。しかも、これより先き同年六月に、Delbrück, Mendelssohn-Bart-

holdy, Montgelas, Weber 等著名の史學者がその愛國的感情より、大戦に對して獨逸のみ責任あるにあらず否むしる協商國側こそより大なる責任ありと主張せる、Deutschland Schuldig? Deutsche Weissbuch über die Verantwortlichkeit der Urheber des Krieges. を發表して居るので、カウツキイは憤慨し、十一月 Wie der Weltkrieg entstand. を表はし、何處までも大戦に對する獨逸の責任を強張して居るのである。以上の兩者の立場の相違は、一は、今や獨逸が大戦の責任者なりと公認されザエルサイユ會議の俎上にかけられるのを見るに忍びず愛國的見地より獨逸のみ責任あるに非すと叫んだものであり、他はその社會主義的立場よりカイゼル時代の帝政外交を非難攻撃する心に急なる所より來たものである。貴重なる史料集に於ても、猶ほその公表の動機を充分に考察してかゝらなければならぬと云ふ好實例である。

猶ほ、ベルリン駐在のババリア外交官の報告書を集めて居る、Dirr博士の編輯にかゝる Bayerische Dokumente zum Kriegsausbruch, 1922. は、上述のカウツキー文集の主張を立證するものである。

有名なる獨逸外務省文書集の公刊は、實に上述のカウツキー文集と密接なる關係あり、獨逸政府が一九一九年夏にカウツキー蒐集の文書刊行をモントグラス伯及びシュッキンク教授に命じた時既に、大戰直前の文書のみにては決して大戰の眞の原因を知るに充分ならず、更に溯つた時代の文書を出版する必要ありとの議あり、八月三日 Meuthen-Issohn-Bartholdy 教授にその任務が委された。更に翌年二月及び三月に J. Lepsius 博士及び F. Thimme 博士が此の大事業を助けることゝなつた。(但しティンメ博士が事業の大部分に當つた事は公然の祕密である。)而して文書蒐集の年代については、最初、大戰の少し前バルカン戦役頃より始

める豫定であつたが熟議の結果、バルカン戦役或は一九〇八—一九〇九年のボスニア問題或はその前のモロッコ問題より始めてもなほ足らず、ウイヘルム二世の治世の最初、否、更に溯つて獨逸帝國創立の時より始めて完全に大戰の原因を知るべしとのことが明かとなり、こゝに多大の苦心を経て全四拾卷五拾四冊實に約一萬五千九百の文書を收むる、近世史學上稀に見る一大文書集 Die Grosse Politik der Europäischen Kabinete 1871—1914. (Berlin, 1926—1927). の完成を見るに至つたのである。本書の刊行は、最近外交史研究上エポック・メイキングの事業であつて、歐米史學界に一大センセーションを起し、今日に至るまで、これを基とした著述論文も多數出現するに至つた。後述の、英國外務省文書集と相並んで、貴重な根本史料である。猶ほ、B. Schwertfeger の編輯に係る Die Diplomatischen Akten des Auswärtigen Amtes

1871—1914: Ein Wegweiser durch das grosse  
Aktenwerk der Deutschen Regierung, は、文書を省  
略、日附順に採録して説明したものであつて、研  
究上頗る便利なるものである。

既に一九一五年に獨逸外務省よりプロバガンダ  
の目的の爲に、ベルジウムの首都ブラッセルにて  
獨逸軍が獲得せしベルジウムの駐英、駐佛、駐獨  
各公使より本國政府に宛てし報告書を公表して居  
るが (Belgische Aktenstücke, 1905—1914. Berlin.)

これは、その文書の採録に於て不公平なる點多く、  
餘程慎重なる心持を以てこれに當らなければなら  
ない。大戦後獨逸外務省は更に、同じくブラッセ  
ルにて獲得した文書中ベルジウム外相より各國駐  
在公使に宛てし外交文書を蒐集し、Bernhard Sch-  
wert feger をして公刊せしめるに至つたが (Zur  
Europäischen Politik, 1897—1914. 5 Bde. Berlin  
1919. 此れの更に完全なるものは、Amtliche Akt-

enstücke zur Geschichte der Europäischen politik,  
1885—1914. 9 Bde.) 此れは、先の “Belgische  
Aktenstücke” に比較すれば、餘程學術的のもの  
で、外交史學者によりて多く利用されるものであ  
る。併し、これとても、所詮、大戦前の國際外交  
に於る獨逸の平和的政策を示さんとする心意より  
公表されたものであるから、無條件にてこれを第  
一史料となし得ず、そこに若干の注意を要するは  
勿論のことである。

大戦當時、駐佛露國大使 Iswolski が盛んに暗中  
飛躍を試み、大戦の勃發に大なる關係を有する人  
物なることは周知のことであつて、獨逸が特にこ  
の點を強張せんとするは當然で、名著 Von Bism-  
arck zum Weltkrieg の著者 Erich Brandenburg を  
して、大戦勃發の責任は所詮 Iswolski と Poincaré  
との肩にかゝると結論せしめたのであるが、こ  
の主張の是非はさておき、獨逸外務省は Friedrich

Strove をして、露國國立文書館より得た大戰前のイヌツォルスキーの書簡を發刊せしめ (Der diplomatische Schriftwechsel Iswolskis 1911-1914. 4 Bde. Berlin. 1826) 大戰勃發に對する露國外交の責任を示さんとして居る。Strove は更に次の如き數著を公けにして居るが、いづれも上記の目的より出たものなる。 (Iswolski und der Weltkrieg. Iswolski im Weltkrieg. (1914—1917). Im Dunkel der Europäischen Geheimdiplomatie.)

次に、塙國を見るに、これ亦獨逸の如く、大戰直後公表されし Rotbuch を以て不満足なりとし、新共和政府より Diplomatische Aktenstücke zum Vorgeschichte des Krieges, 1914: Ergänzungen und Nachrichten zum Österreich-Ungarische Rotbuch. Wien 1919. を出し、これが編纂者たる R. Gooss は、これ亦獨逸のカウツキーに於るに同じく、Das Wiener Kabinete und die Entstehung der Weltkrieges.

Wien 1919. を著はして、大戰勃發に對する塙國外交、殊に當時の外相たりし Borchold の責任を主張して居る。この著を關聯し、W. Fraknoi. Die Ungarische Regierung und die Entstehung des Weltkrieges. も重要なものである。

塙國方面より公表された最も重要な史料は勿論、ウキーン大學教授 Dr. Pribram の、Die Politische Geheimverträge Österreich-Ungarns, 1878—1914. Wien. 1920. なるものなり。これが英譯 A. C. Coolidge, The Secret Treaties of Austria-Hungary, 1878—1914. には、重要な附録として、露土戰役前の塙露關係に屬する Schönbrunn, Reichstadt, Budapest の三協定、佛露同盟に關する文書、伊佛協定に關する文書を採録して居る。勿論、他よりの再録であるが便利である。これは、三國同盟の内容を始めて史學界に紹介し、更にその同盟交渉の仔細を塙國文書によつて研究した頗る重要な

著述であつて、その出現は史學界に大なるセンセーションを起したのである。猶、他の多くの條約をも載せて居る。著者は更に第二卷を出すべきことを豫告して居るが、筆者未だ寡聞にしてその發刊を聞かず、その一日も速かならんことを祈るものである。

次に露國の方面からは、帝政崩壊後史料の發表頗る盛んであつたが、系統的に行はれなかつたのは頗る遺憾である。B. von Siebert, *Diplomatische Aktenstücke zur Geschichte der Ententpolitik der Vorkriegsjahre*, Berlin 1921, の如きは、頗る貴重なる文書集であるが、ソヴェト政府よりも、帝政時代の祕密外交文書が、その機關誌たる *Prawda* 或は文書集の形で *Krasny Archiv* により續々と發表されたのである。その一部分は、佛國より、Emile Laloy, *Les documents secrets publiés par les Bolscheviki*, 1920. として發行されて居る。

次に佛國は如何と云ふに、史料の公表餘り盛ならず、この點英國と同様である。一九一八年には、露國帝政崩壊を機として佛露同盟に關する文書集が刊され、始めて該同盟の内容及び交渉の仔細が明かにされた。(Documents diplomatiques, l'alliance franco-russe.) 次に、一九二〇年には、伊佛協定に關する文書が不満足な範圍ではあるが公表された。(Documents diplomatiques, Les accords franco-italiens de 1900-1902.) 猶、バルカン戦争に關する *Les Affaires Balkaniques, 1912-1914* が公けにされて居る。史料の公表は以上に止つて居るが G. Pagès, *L'Hégémonie Allemande 1871-1904* (Rapport de la Commission d'Enquête sur les faits de la Guerre.) 並びに F. Bourgeois et G. Pagès, *Les Origines et les Responsabilités de la Grande Guerre Paris, 1922.* は、その中に外務省の文書を多數採録して居る點に於て史料の價値を有するも

のとすべきである。

既述のイヌヴォルスキー文書が佛國よりも公刊されて居る。Marchand, *Un Livre Noir Diplomatique d'avant-Guerre et de Guerre d'après les Documents des Archives russes.* (1910—1917) 3 Tomes. Paris 即ち之である。この書も、既述のSieveの書も、その原本は同一のものであつて、一九二二年、ソヴェト政府が露語にて「一九一〇年より一九一四年に至る佛露關係史料」として公表されたものが即ちそれである。併しMarchand, Sieveの書は共に、ソヴェト政府發表のものに比して遙かに多數の文書を載せて居る。大戰勃發に對する佛國の責任を主張する材料とされ勝ちである、イヌヴォルスキー文集が佛國にて發行されたことは一見奇異であるが、その發行所がLibrairie du Travailなるを見ればなる程と首肯される。

獨露兩皇帝の交換書簡集は、一般の興味を引い

た爲か頗る多種である。先づ獨逸からはW. Goetz, Briefe Wilhelms II. an den Zaren, 1894—1914, Berlin, 1920. が出て居るが、これが最も完全なるものとせらる。佛國よりはA Savinsky, Guillaume II. et la Russie. Ses dépêches à Nicolas II. 1903—1905. (Revue des deux mondes. 1922). 及びソヴェト政府によりて發表され、M. Semenovの翻譯に係る、Correspondance de Guillaume II et Nicolas II. Paris, 1924. がある。英米よりはN. E. Grant, The Kaisers Letters to the Tsar. 及びH. Bernstein, The Willy-Nicky Correspondance. New York, 1918. が出て居る。

最後に英國を見るに、その態度頗る悠長たるものあり、漸く最近に至つて吾人に貴重なる外交文書集を提供した。G. P. Gooch, H. Temperleyの編纂に係る British Documents on the Origins of the War, 1898—1914. II Vols. London, 1926—即ち



い點に於て有利なる立場にある我が國西洋史學者の奮起を望んで止まぬ次第である。以上に加ふるに若し佛國の外交文書集が公けにされる時が來らば、吾人の喜びこれに過ぎたるものはない。

猶、史料として擧ぐべきものに、備忘録なるものがあるが、これは實に驚くべき程多數であつて、世界大戰前の外交にいやしくも多少の關係を持つた政治家の殆んど凡てが備忘録を公けにしたと云つても敢て過言ではなく、これは一時殆んど讀書界の流行の如き觀を呈したのである。上は Wilhelm II. 或は Poincaré より、下は公使、軍人に至るまで争つて備忘録を残して居る。又著述の中に於ても史料的價値を有するものは少くない。獨逸の Otto Hammann. の數著の如きはその代表的のものである。これらのことに關しては、博學なるグーチ博士が、“Recent Revelations of European Diplomacy, London 1927.”に於て、吾人に詳